

マンファエドレ・ラ・カプリアのナポリ論

バルテノペア共和国とナポリ方言

柱 本 元 彦

ナポリがカオス的狀態にある大都會だということは誰もが知っている。だがナポリの混沌はかなり奇妙なもので、そこではすべてが差異化されつつ混ざり合う。根強い階級社会の圧力も敵として存在するが、ある種の共生状態がつねに保たれているように見える。この状態を決定づけたのは十九世紀半ばの都市改造だった。他の大都市でもおこなわれたように、下層階級の人々を立ち退かせて工業地区が確保されたとき、それまで海岸沿いに居住していた下層民を受け入れたのが、驚くべきことに都市の中心部だったのである（このような処置がすみやかに受け入れられたことからわかるように、共生状態 は以前からも存在してはいた）。建物の半ば地面にめりこんだ一階部分が開放され、同じ地域の同じ建物のなかにブルジョワと細民とが同居 するようにになった。いわゆる旧市街、スパッカ・

ナポリ地区は、今でこそ多くがメンテナンスもされずに荒れているが（ブルジョワ階級は次第に旧市街を見捨てて、山の手へと移っていった）、元来いずれも立派な建築であったことは一目でわかる。現在この下町は庶民の生活の場でありながら、文化財の集積する旧市街として観光客が往来し（一九九五年にユネスコ世界遺産に登録された）、大学をはじめとするさまざまな施設が機能する地区になっている。

ギリシア殖民都市以来の歴史を持ったこの都市（ナポリ下町の歴史は紀元前五・六世紀にさかのぼる）、中世から一八六一年の統一まで南イタリア全土を統治していたナポリ王国の首都は、何世紀もの間ロンドンやパリ、ウィーンについてヨーロッパ最大の都市のひとつだった。しかし今日、その見る影も無くヨーロッパの辺境に落ちてしまい、低迷する南イタリア経済と

血なまぐさい組織犯罪を象徴する都市になってしまった。素晴らしい過去のイメージと現状の間にはさまれ、同じイタリア人でもナポリに生まれ育つことは複雑なことだ。それは「ナポリ論」が巷にあふれる所以でもある。

現代イタリア文学界の大御所ラッファエーレ・ラ・カプリアも、そのような複雑なナポリ人のひとりであり、一步距離を置きながらもナポリから離れることができないでいる。彼のナポリ論『L'armonia perduta（失われた調和）』（一九八六年初版）は、人それぞれに異なる「ナポリ気質とは何か」という問題をひとまず中断し、その起源を提示しようとしている。ラ・カプリアにしたがえば、一種の集団演技であるナポリ気質は、平民＝下層民への恐怖を悪魔被いし、失われた調和を再現しようとする小市民の無意識の創作物であり、十九世紀初めに誕生し、方言を通して隔々にまで行き渡ったものである。いかにも小市民階級の視点から書かれているが、ナポリ方言を鍵として七十九九年のナポリ革命に切断の時を置く考察は興味深い。ともかくまずそのテーマ的な章を以下に訳出してみよう。

方言の魔笛

嵐のような車の流れに大混乱のナポリの街路で、喧騒を超えて何かがやってくる。何か軽やかで魅惑的な、はじめは何だか

分らない、ふとした印象、空気の動き、音……。たしかに音だ。郷愁をそそるような方言の響き。ときおり耳に流れ込むこの音は、魔法のように、野蛮で絶望的な耐えがたい周囲の喧騒をなだめる。この方言がわたしの部族をひとつに結びつけ、分解過程のなかの唯一の接着剤になっているのだ。政治や人間や制度ではなく過去の名残でもなく、子宮膜のような方言が、目には見えず綻びもしない網となって、ナポリ気質のアイデンティティ確認の場を守っている。

騒がしい街路を後にして横道に入ると、たちどころに荒々しい声はどこからか聞こえ、気がつくや喧嘩のただなかにいた。まさに取っ組み合いがはじまるところで、意味が分からないくらい汚い言葉で痛烈な侮辱が飛び交い、わたしは本能的に身構え、すこし離れて見守ることにする。平民の群れを前にした市民階級の昔の恐怖が心の底から湧き上がってくるのを感じながら。

そう、平民である。普段は無気力のなか自分たちの気紛れに専念している彼らが、不意に表に現われる。平民、隠れたものの、この都市の無意識の内につねに激んでいるもの。

……マサニエツコの反乱を記憶から拭い去ることはできないが、一七九九年はもっと凄まじかった。事件の経過をヴィンチエンツォ・クオーコが描いている。フランス革命をモデルに、ナポリ市民階級の一部、その最良の部分が革命に立ち上がった。だが民衆、平民はこれを虐殺したのである。当時、市民と平民

は二つの異なる種族だったと言える。言葉も違っており、互いに理解しあえなかった。サンタ・フェーデ(聖なる信仰)軍の進行はさながら蒙古族の侵攻だった。神の鞭たるルッフォ神父を先頭にして破壊の限りが尽くされた。それは闇に包まれた野蠻で不条理な歴史的一幕で、平民は権力を抑圧者の王に返還し、自由を語った理想主義を文字通り粉砕したのである。すべてが終わった後でクオーコは次のように書いている。

「ナポリは悲惨の極みだった。善きもの、偉大なもの、生産的なものはすべて破壊され、かろうじて生き残った心ある者たちは、難破した船から奇跡的に助かったことく、家族もなく祖国もなく広大な荒地をさまよい……彼らに敵対した反革命派でさえ、自らが死へと追いやった者たちの喪失を嘆き悲しんでいた……」。

それは悲劇、生き残ったナポリ小市民(もはや大市民ではない)の心に消しがたい傷痕を残した挫折だった。その後は王と平民との二つの勢力に挟まれた救いようのない状況、不安定にもがくばかりの状態が続いたのであり、小市民階級は、忍耐強い仲介の作業に従事しながら破壊を逃れようとしたのである。民主主義革命も産業革命も不可能なところをいけば実存的な革命に向かったわけだ。それは指導階級となることを拒否したときに生まれたのかも知れなかった。イタリヤが統一された後にローマの中央に仕える者たちもいたが、多くは平民の感情を文法的に解釈して自らのイメージに合わせ、あらゆる差異を呑み

込んで平民に合流したのである。まさに前代未聞の混交だった。

それゆえナポリは、文化の華が咲き乱れたまさにその時代にあつて、どの分野でも自らの過去に平伏しているように見えるのである。まるでニシキヘビという小さな動物(つまり小市民)が大きな動物(平民)を少しづつ呑み込んでいくように、大規模な消化がおこなわれた。それは長い時間のかかる骨の折れる消化活動であり、実際のところ、まわりを眺めて他の土地で何が起きているか理解したり、世界が変わってゆくのを追いかけてたりといった心配をする時間さえなかったわけだ。この消化活動が原因となってナポリは「歴史」の外にはみ出し、この消化活動の結果が、集団演技であり「ナポリ気質」なのだ。この社会的混交のなかでは、階級や所有財産のいかなる格差も、バルテノペ人の強力な等質性、「諸階級をひとつの流動的なマッスに煉り合わせてしまふ心理的な家族的統一体」の前には二義的なものとなる。

ところで一七九九年に首を切り落とされた市民階級、もはや啓蒙的ではなく家父長主義と縁故主義に回帰したこのナポリ市民階級は(階級として大づかみに見た場合である。非常に優れた仕事をおこなった個人はもちろんだ)、どのような手段によつて自分たちの全体性を保ち、都市のさまざまな社会階級をすべて、とりわけ怪物的な平民階級を消化することができたのだろうか。どのようにして指導階級の任務を放棄し単なる消

化 階級となり、どのような道をたどって「ナポリ気質」にいたる実存的革命を遂行していったのだろうか。

その手段は方言だった。

平民と、共通の言葉を持たなかった「ゆえに、この市民階級は大きな犠牲を払うことになった。乗り越えるべき本来の問題はそこ、方言にあると、おそらく彼らは本能的に悟ったのであり、闇雲にさまざまなおこなったわけだ。もちろんわたくしが語っているのは、無意識になされた本能的な振る舞いであって、断固とした行動でも計画的な戦略でもない。市民階級の思いは、「都市が平民の支配下であり平民の声しか聞こえなかったとき」、無政府的混乱の日々の恐怖に染まっていた。

平民とは解決可能な社会問題ではなく大昔からの解決しえないドラマである、としか考えられなかった小市民階級は、オルフェウスが動物たちを手懐けたように、魅力的な方言の魔笛を自己流に吹きながら平民の群れを宥めようとしたのである。善き感情に浸されたこの方言は、人好きのする愛すべきものとなり、巷で話され歌に歌われた。ナポリの闇に沈んだ下層で耐えがたく見えたすべては、方言の魔法を通すと、それほど暗くもない許容可能なものに思われた。平民たちは徐々にそれを受け入れ（上演 を受け入れ）、この方言を話すうちに、野蠻な情動は少なくとも表面的には穏やかとなり、方言の言葉と音が示唆する態度に従いはじめた。こうして、例をあげれば、現実を悪魔被いするように召喚される方言の対照的な場面が、今

日も「大衆芝居」のなかに見られるのである。殺人、犯罪世界の残忍な事件、名誉と殺傷の凄惨な出来事は、方言を共犯者として、マンマ とか「こころ」といった言葉にあふれた小市民的感情に浸される。

そういった目的のために操作され洗練され、恐るべき平民に広められた方言は、平民たち本来の方言にあった野生の力強さを犠牲にしながら、あらゆるとげとげしさを削ぎ落として耳に心地よく穏やかに響いた。かつては階級ごとにその階級の言葉があつたが、ナポリ方言の多様性は消滅し、小市民階級の心情の表現である家族主義的方言だけが残ったのである。先に触れたように、方言が小市民階級の全体性を守るための第一の動機となつたのは当然の成り行きだった。まさにそこ、威嚇と恐怖が渦巻く路上で怒り狂う群集が荒々しい言葉を叫び喚くそこ、その方言のなか、そこに消し去らねばならないものがあつた。この恐怖によって、たとえばヴィヴァーニが好まれることはなかつたのである。彼の言葉にはまだ馴化されていない響きが聞き取れたのだから……。

上演 の経営者となつたこの市民階級の影響のもとで、方言はブルヴァール大通りの演劇のように広まり、スカルペッタがペティートの後を継いだ。ブルチネツラは街路から追い払われ、その後には小市民的なシヨシャモツカがおさまった。危険な臭いのするブルチネツラの追放は、ナポリの年代記には不明瞭にしか記されていない歴史的な事件だった。それは言語的全

体支配主義の勝利を、つまり寄生的誘惑者たるナポリ小市民の感情的で政治的なモラルが覇を握ったことを意味していた。

だがどうしてこの方言、市民階級の方言が、人々の間にこれほど迅速かつ隅々にまで広がったのだろうか。思うにその主な原因は、集団意識の奥底に根ざした「欲望」と「夢」を愛撫し、薔薇色の「調和」の「神話」を謳い上げたことにある。そして、ナポリ気質の知識人に「演劇、カンツォーネ、新聞の大量生産を保証させた」、まさに真の「文化産業」の圧力も存在した。

『イタリアのナポリ』でアントニオ・ギレリが書いているように、たとえばカンツォーネは「さらに仮借のない装置」（新聞や演劇やレビューよりも）だったのであり、ムロロやガルドイェリ、ボヴィオといった方言詩人は、「カブツ口、カリファーン、アルマンド・ジル、E・A・マリオなど、他にも数多くの疲れを知らない「作詞者」と同じく、毎年のように街路や海岸に大量の詩を滝のように流していた……。道端、レストランの片隅、レビューやサロン、家庭の演奏会で、数かぎりなく繰り返された歌のモチーフは、夜の声、無慈悲な心、魅惑の沈黙、ナポリの涙、恋する与太者、ボジッリポの匂いたつ空気とサンタ・ルチアの集魚灯に別れを告げる移民といったものだった」。しかしながら、「ヴァレンテやラーマ、タリアフェツリ、ファルヴォ、デ・クルティス、ガンバルデツラ、ブオンジョヴァンニ、ナルデツラらの音楽がなければ、詩人たちの言葉も、ただ中上流階級の狭いサークルの内で読まれただけで、

ささやかな地方出版物の埃のなかに埋もれてしまったことだろう」。さらに言い足せば「これらの音楽がなかったら、詩人たちが表現していたナポリ気質、穏やかな方言のその新しい音もまた、耳に心地よく心の琴線に触れるものとして、階級を越えたナポリ人共通の言葉とはならなかったに違いない。

方言によるこのプロバガンダ活動だが、小市民階級の本能が、バルテノペア共和国の啓蒙主義的理性（共和国の指導者たちも方言の根本的な重要性を認識してはいた）よりも効果的かつ「芸術的」に働いたことは、しっかりと評価すべきだろう。それは今日のマス・メディアの「戦略」にのみ比較できるような浸透性と説得力を持っていたのである。

それゆえ、社会的変容の道となり階級の覇権の支えとなった方言の中心的役割について、わたしがここに書き散らした事柄は（いくら空想的にすぎたかもしれないが）、それほど奇異なことではないだろうと思う。

……喧嘩騒ぎは一段落したようだ。と言うよりはむしろ、「大衆芝居」の無害な図式に収まりつつあるらしい。上演が勝ちを占め、幸いにも「様式」が内容に取り代わった。つまりこれは、小市民たちの口車が多かれ少なかれ成功したということではないのだろうか。当時も同じだったのではないだろうか。そして今日、今回もまた、「ナポリ気質」が勝利したのであり、穏便に対処することを遠まわしに押しつけたのである。

ナボリの歴史のなかで民衆の大規模な叛乱は二度記録されている。第一が一六四七、四八年のマサニエツ口の乱、第二が革命政府に対する一七九九年の叛乱である。いずれの場合も、重い税負担への反発が直接の原因となつて起こり、政府と富裕階級に反旗を翻しながら国王への忠誠を新たにするという、いかにも民衆的なものだった。だがその百五十年の間にナボリの社会状況はまったく変わっている。スペイン支配下にあつて植民地的状態に喘いでいた時代と、ブルボン家のカルロ七世によるナポリ王国の復活があり、啓蒙思想の洗礼を受けた時代とでは大きな差があつた。マサニエツ口の乱では、平民たちの動きは中間層の陰謀を超えて制御できないものになつたわけだが、ナポリ市民階級自体もまだそれほど自立的な勢力を形成していなかった。しかし一七九九年は、平民はまさに正面から市民に襲いかつたのである。ラ・カプリアが隠れたものと表現している平民の中核は、ラツザリと呼ばれる下層階級の最底辺にいた野蠻人たちが、革命政府は彼らにどう対処したのだらうか。

マサニエツ口の乱以来、ラツザリは国王側の暗黙の承認のもとに平民を統制するという仲介の任を負い、市民階級はもちろん彼らの暴力を恐れていた。フェルディナンド四世（カルロ七世の息子）が王位にあつた十八世紀後半、ラツザリは影を潜めていたが、それは王との友好関係のもとで国を裏から支えていたのである。彼らの動きが再び表面化したのは、一七八八

年十二月二十一日にフェルディナンドが国を見捨て、可能なかぎりの財産を携えパレルモへと逃亡したときだ。フランス軍の侵入に対して執拗に抵抗し、敵をたじろがせたのは、オーストリア人将校が指揮するナポリ軍ではなく、国王逃亡にかつてない幻滅を味わつたはずのラツザリに率いられた下層民だった。支配者の交代には無関心だった下層階級が、はじめて自発的に祖国防衛のために立ち上がったとも言える。もしかすると下層民もまた、市民的な意識を持ちはじめた勢力になつていたのかもしれない（ゲーテがナポリに滞在したのは一七八七年だった。彼が描いたナポリ下層の人々は怠惰なルンペンではない）。

フランス革命に共感していたエリート市民階級のジャコバン派は、ラツザリの一部を引き入れることに成功し、一七九九年一月二十一日、バルテノベア共和国の成立を宣言する。フランス軍が入城したのは一月二十三日だった。臨時政府が組織され、シチリアを除く南イタリア全土が名目上は共和国となつたのである。だが共和国の歩みは最初から苦難に満ちていた。征服者として振舞つフランス軍が膨大な経費を要求し、政策を左右していたし、地方では反革命の蜂起が絶えずおこつていた。当然ながら農村地帯にジャコバン派は存在していなかった。各地の市町村に「民主化要員」が派遣されプロバガンダがおこなわれるが、自由や平等といった言葉をもち込むだけでは、新政府による恩恵があるのかどうかも理解させられない。臨時政府の主要課題だった封建制廃止法が発表されたのは、すでに危機的状

況が表面化していた四月二十七日である。しかもヴィンチェンツォ・ルツォら急進派が望んでいた封土解放条項が削られてしまい（王や領主の富は篡奪の結果であり民衆に返還されなければならぬとルツォは語った）、地方の農民にとってはほとんど益の無いものだった（この時の封建制廃止法は次の三点にまとめられる。1、領主の肩書きとそれに伴う特権は廃止される。2、税は領主ではなく役所に納められる。3、領主がすでに所有する土地や建物などの財産はすべて私有財産として認められる）。フランス軍に蹂躪された農村にはフランスを後ろ盾にする者たちへの不信が残っていたし、領主に払っていた税を共和国に払うことになったからといって農民が満足するわけはなかった。さらに、ヴィンチェンツォ・クオーコが告発しているように、民主化要員のなかには民衆の宗教的信仰を攻撃する者たちもあり（革命政府自体はむしろ階級間の接点として宗教を大いに利用していた）、革命政府が地方農民の心をつかむのは難しかった。

ナポリ市内はフランス駐屯軍のもとに一見平和が保たれていた。共和国宣言から時を経ずして、臨時政府の機関紙でもあった隔週新聞『モニトール・ナポレターノ』は、第一面冒頭に次のような勧告を掲載している（二月九日第三号）。「前号でわれわれは、これらの文章をナポリ民衆の言葉に直して公にすることを勧めた。……国力は君主制においても民衆を基盤としているが、民主制にあつては国力のみか尊厳の問題でもある。……

彼らとわれわれが分離しているのは、まさに共通の言葉がないからである。これまでの悪の原因を考えてみれば、とりわけこの分離に由来していることがわかるだろう。それは専制政治の秘密だ……われわれはこの分離を打ち砕かなくてはならない。教育制度の欠如のため平民が市民のように考えられないのであれば、市民が平民のように話さなくてはならない。民衆の言葉によって平民と話し交流をおこなう善き市民は、これによって有益となるばかりか市民の自分を尽くしているのである」。したがって市民階級もナポリの下層民を取り込もうとしてはいた。その手段はまさに方言であるが、言葉は、上から下への一方的な伝達を実現させる単なる道具ではない。プロバガンダは民衆の歌から人形劇まで利用して推し進められた。だがジャコバン派の市民は平民たちの考えを無視したまま、自分たちの思想を伝えるだけで足りると思ったのだろうか。つまるところこれは地方に派遣された民主化要員と同じ態度である。「すべてが終わった後」、流刑の身となったヴィンチェンツォ・クオーコは、一八〇〇年に有名な『Saggio storico sulla rivoluzione di Napoli del 1799』（一七九九年ナポリ革命についての歴史的試論）を書き、革命が失敗した原因を分析している。彼が発表する最大の原因は、まさに、革命政府の理想と情熱が民衆から分離したまま独走し、時機に投じた政策をだせなかったことである。もちろん臨時政府も一枚岩ではなく、フランスの干渉の他にも貴族・領主出身の保守派と急進派との対立があった。要

するに妥当な安定を見出す時間もないままに走り続けたのである。

急進派のひとりに詩人ルイジ・セリオがいる。革命の二十年前のことだが、経済学者フェルディナンド・ガリアーニが『ナポリ方言論』(1776)を出版した。これに対してセリオは『ガリアーニ神父のナポリ方言論への反駁』(1788)を書き、有名な方言論争となった。「トスカナ語ではなくナポリ語、ただし平民の言葉を浄化した市民的で文化的なナポリ語」を歴史の内を求めるガリアーニに対し、一世代若いセリオは今ここに生きる民衆の自発的な言葉にしか価値はないとする。ラ・カプリアも『失われた調和』の一章でこの論争に触れ、「方言の魔笛」となった言葉はたしかにガリアーニが思い描いたナポリ語かもしれないが、それは民衆のなかに入っていくセリオのような態度がなければ実現しなかつたと語る。ともかく、十八世紀のイタリアでもっとも華やかに成長しつつあったナポリ文化のなかには方言見直しの機運もあり、一七八〇年代にはナポリの出版者ジュゼッペ・マリア・ポルチェッリによる『ナポリ方言詩全集』、いわゆるポルチェッリアーナのシリーズが刊行されていた。集中にはガリアーニの方言論や彼の遺作となったナポリ方言辞典も含まれている。ガリアーニ自身はまだ以前の時代に属し、民衆に対する軽蔑を露わにしていたが、フランスに十年滞在し、百科全書派と親交を持ち、パルテノペア共和国の世代を準備したひとりだった。セリオのような民衆派もこのよう

な文脈から生まれたのである。事実パルテノペア共和国はチザルピーナ共和国やローマ共和国などよりも、独立性が高く人材もはるかに豊富だった。改革への気運はすでに熟していたと言えるだろう。もしフランス革命が政情を反動へと急転回させていなかっただら、ナポリは穏やかに正常な歴史をたどり、ブルジョア階級が指導層となつて、すでに危機を迎えていた封建制を廃止し、徐々に下層階級を取り込んでいくことに成功したかもしれない(そうなつていればトリノのサヴォイア家ではなくナポリがイタリア統一を果たすことになつただろう)。いずれにせよ革命を断罪することは無益であり、クローチェが言うように「他の地域と同じくイタリア南部もまた、旧来の状態にしがみついていたのではなく、自らの形式とリズムによつて新しいヨーロッパの生きた運動に参加したのであり、しかも注目すべき独自性を備えていた」ことを評価すべきだろう。しかしながら、急速な展開を強いられ破滅を運命づけられたような革命と、ラ・カプリアが「ひとつの階級を全滅させた」と言う反革命の嵐によつて、ナポリの歴史に暴力的な切断がおこつたのは事実だった。大市民は確かに民衆に敗れたわけだが、彼らが民衆を恐れたわけではない。大市民を抹殺したのも民衆ではなく国王だった。

ナポリ王フェルディナンド四世は、内政、外交、軍事に渡りあらゆる人選を間違え続けたが、反革命軍の指導者を選択したこの時だけは的確だった。全権を委任されたファブリツィオ・

ルッフォ枢機卿は、わずか六名の部下と共にパレルモを発ち、二月七日にカラブリアに上陸すると、短期間の内に足場を固めることに成功する。王と宗教とを旗印にしたルッフォ枢機卿の軍は、サンタ・フェーデと名づけられた。戦況が大きく変わったのは四月、オーストリア軍の進攻により北イタリア戦線が危うくなった時からである。フランス軍はごく一部を除いて北に向かい南イタリアを後にする。フランスの方針によって貧弱なものでしかなかったバルテノペア共和国の軍隊は、援軍が戻るまで（その時は来なかった）広大な地域を守らなくてはならない。だがここで初めて、共和国軍とサンタ・フェーデ軍は同じ地平に立ったとも言える（共和国にはイギリス艦隊からの圧力もあったが）。どちらも職業軍人の数は少ない。あらゆる土地で農民であれ山賊であれ可能な兵力が総動員され（だが共和国側はこの動員政策にも度々失敗している）、南イタリアの数多くの市町村はまさに同胞が血で血を洗う内乱状態となった。

ファブリツィオ・ルッフォの全体像ははつきりしない。彼の功績にも関わらずフェルディナンドが関係資料の刊行を禁じたためでもある。だがすでにグラムシはルッフォを単なる反動家ではないと言っていた。それは彼の出身地であり活動拠点となったカラブリアの伝統と切り離せないものだ。十七世紀初頭にカンパネッラが企てた神権政治革命にも見られるように、中間層を欠きつねに貧困のなかに押し込められたカラブリアには、

根強い宗教的伝統と反骨精神とがあつた。イタリア南部の現実を理解していたのは、共和国政府ではなくルッフォだった。

サンタ・フェーデは南部的な蜂起のモデルとなつたのである。ナポリ攻略後にルッフォは共和国政府に寛大な降伏条約を結んでいる。ジャコバン派の処刑はなかつたはずだった。だがその条約は、マリア・カローリーナ、ネルソン提督、フェルディナンドによって、非合法的に破棄される。失意のうちにルッフォは表舞台を降り、百名以上のジャコバン派つまりナポリ知識階級のほぼ全体が処刑された。まさに王と平民との絶対君主制が敷かれたわけだが、この処置は国の自殺行為にも等しかつた。共和国派ではなかつた。臆病な小市民が生き残つたわけだが、ラ・カプリアが言つように、彼らは無政府状態の混乱の恐怖に打ちのめされたに違いない。そしてフェルディナンド帰還の後には、「王と平民との間にはさまれて」、自らの位置を見出すことができなかつた。こうしてナポリはヨーロッパの辺境となる運命を受け入れたのである。

共和国の最後の抵抗線、カゼルタ近郊のマッダレーナ水道橋は、六月十三日に突破され（ルイジ・セリオはこの時に戦死している）、その日の内にサンタ・フェーデ軍はナポリに入城する。ナポリ市内の民衆が凶暴化したのはこの時だった。ジャコバン派は二つの城、カステル・ヌオーヴォとカステル・デッローヴォに立てこもる。「指示された城に逃げ遅れた者たちは憐れだった。国王万歳と叫びながら群衆は彼らに襲いかか

り打ち殺していた。市街のいたるところに処刑の火が燃え上がり……酔いしれた民衆は瀕死の犠牲者をその火のなかに投げ込んでいた。わたしは目撃したのだが、恥ずべき平民たちの内には、非道な怒りにまかせて不幸な生贄の肉を食らい、勝ち誇った様子でいる者もいた」とエマヌエール・パレルモは書いている。城に結集したジャコバン派は激しく抵抗したが、六月十九日にルッフォ枢機卿が提示した降伏条約を受け入れ（この条約に従えば、生命ばかりか財産も保証されナポリに残ることも去ることも自由だった）、ここに革命政府は五か月の命を終えたのである。しかしながら市内では暴力と混乱の日々が続く。カール・デ・ニコラは七月三日の日記にこう書いている。「昨日発覚したという裏切りによって民衆の怒りが再燃し、逮捕や略奪がまたはじまった。昨日見たのは口にするのも恐ろしいことだった……猛り狂った民衆が二人のジャコバン派の身体を焼き、火の通った肉を裂いて食べていた。次から次にそれを手渡し、子供にまで与えていたのだ。ここは敵をむさぼり食らう食人種の街だ」。七月九日にはフェルディナンドがナポリに帰還するが、騒乱状態はなかなか納まらぬ。共和国に加担した者たちへの追求も厳しく、何か月にもわたって毎日のようにジャコバン派の処刑がおこなわれたのである。ディオメデ・マリネツリの八月四日の日記を見ると、「今朝はカプアーナ門で二人が撲殺された……今日は共和国を倒した聖アントニオの彫像を掲げた行進があり、民衆たちは賑やかに騒いでいる。それで聖アン

トニオの祭りのための金をせびりに来るわけだが、断わりでもしたら大変なことになる。ジャコバン派だと疑われるからだ。金を持つていなかったがゆえに逮捕されて投獄された者もいた」とある（サンタ・フェーデ 軍がナポリに入城した六月十三日は聖アントニオの祝日だった）。この時期に千人以上もの市民が投獄された。民衆の興奮がいつ納まったのかは定かではないが、デ・ニコラの日記は、一年後もなおしばしば不穏な気配を見せる民衆への恐怖を伝えている。

一七九九年末、フランスではナポレオンが覇権を握り、翌年にはイタリヤ遠征も再開される。フェルディナンドはこの度もフランスに譲歩せざるをえない。一八〇一年三月の和平条約により、ナポリを離れていた共和国派親フランス派の帰国もはじまる。殲滅したはずの彼らが戻ってくるのだ。平民たちは怒りを新たにしたかもしれないが、王の名によって立ち上がることはもうできなかった。一八〇六年一月二十三日、フェルディナンドは七年前のようにパレルモに逃避する。だがフランス軍の再来に対して民衆の叛乱はおこらない。こうしてナポリ王となったミユラ將軍のナポレオン時代が十年間続くわけだが、ナポリを愛して善政をおこなったミユラは、民衆からも慕われた。ラ・カプリアは「薔薇色の調和」の時代を革命以前の十八世紀においているが、王・市民・平民が一体となって改革を推し進めたミユラの時代がなければ、「調和の神話」は生まれなかつたかもしれない。民衆の教育制度が整えられたのもこの時代で

ある。ナポレオンの失墜とともにミユラの時代は終わり、一八五年六月九日、フェルディナンドがナポリに帰還すると、またしても反動の時代がはじまる。しかしながら、リソルジメントの運動が活発化する一方でカルボナリー党の反乱なども勃発し、十九世紀のナポリ市民階級の「消化活動」は決して沈黙の内におこなわれたのではない。そしてナポリの方言はどのように展開したのだろうか。ラ・カブリアはその間の事情をペティート(1822-1876)からスカルペッタ(1853-1925)の演劇へ、といった表現で触れているにすぎない。とまかくカンツォーネが最後の仕上げを果たしたわけだ。「方言の魔笛」に名が引用されている詩人や作曲家は、最年長のカブッコ以外すべて一八七〇年代八〇年代の生まれであり、彼らの活動期は十九世紀末から二十世紀初頭である。つまりナポリ気質が誕生したのは十九世紀初頭だったが、それは一世紀後に成熟したと言えるようだ。

その誕生の時すでにノスタルジーに浸されていたナポリ気質は、成熟からさらに一世紀経った現在ほ々とつにき衰えてしまった。とはいえ今日もどこかでナポリの街のいたるところで、「誰かが」ナポリっ子の全員が、「ナポリ談義の花火を打ち上げてはその束の間の彩りにつつつを抜かしているのだから、薔薇色の夢の夢、イメージのイメージを求めつつづけているのである。」

参考文献

- Raffaele La Capria, ¹⁾ *armonia perduta – Una fantasma sulla storia di Napoli*, Milano, 1986.
- Benedetto Croce, ²⁾ *Storia del Regno di Napoli*, Bari, 1984.
- Antonio Ghirelli, ³⁾ *Storia di Napoli*, Torino, 1992.
- Tommaso Pedio, ⁴⁾ *La Repubblica Napoletana del 1799*, Bari, 1986.
- Vincenzo Cuoco, ⁵⁾ *Saggio storico sulla rivoluzione di Napoli del 1799*, Napoli, 1998.
- Jean-Jacque Clemeent, ⁶⁾ *799–Signori e Popolo, Napoli città aperta*, Napoli, 1998.
- Domenico Petromasi, ⁷⁾ *Alla riconquista del Regno, La marcia del Cardinale Ruffo dalle Calabria a Napoli*, Napoli, 1994.
- Domenico Scatoglio, ⁸⁾ *Tazzari e giacobini*, Napoli, 1999.
- Ferdinando Galiani, ⁹⁾ *Del dialetto napoletano*, Napoli, 1783.
- ¹⁰⁾ *Monitore Napoletano*, ¹¹⁾ *Diario Napoletano di Carlo De Nicola La caduta di Napoli*, ¹²⁾ *Entrata delle Armi Reali in Napoli*. *Dionede Marinellif*, ¹³⁾ *Breve cenno storico critico su la Repubblica napoletana di Emanuele Palernof*, ¹⁴⁾ *La Legge Feudale – Testo della versione devinativa approvata il 24 aprile. A confronto il testo del progetto originario*, <http://www.repubblicanapoletana.it/resu.htm>.